

TAKI no TAWAGOTO

By 濱 博一

今月も代筆で失礼致します。

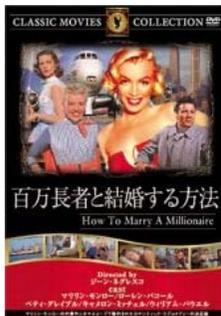
4月号に続き、にわか映画コメントです。

近所の大型SC内のレコード店が閉店セールで500円DVDが3本1000円の破格値となり、思わず往年の名作を買いあさって、にわか名画コレクションができました。とはいえ、殆ど予備知識無しでパッケージの紹介文などにつられての衝動買いの賜物です。

何かとお疲れ気味の状態でしたので、勢い軽めのもの、娯楽モノに偏っています。そんな中で、グレゴリーペック主演の「頭上の敵機」。ある時期から戦争モノは観ない事にしていたのですが、さすが渋処の俳優の名演を久々に堪能しました。部隊を立て直す鬼指令。しかし冷徹な表情とは裏腹に、次々と有能な部下を失うことへの精神的な苦悩…。男の汗と油や硝煙の臭いがしてくるような一編。



ガラッと変わって「百万長者と結婚する方法」。恥ずかしながらモンローの映画を一つも観た事はありませんでした。彼女が一躍有名になったこの映画。主役は彼女ではありません。それに、はて何処かで観た事があるシーンが所々に。そう。当然こちらがオリジナル。やはり抑えるべき映画は観て置くものです。それにしても彼女らに誑かされては振られてゆく叔父様方の素敵なこと。こんな振る舞いができたら…おっと、とんだ失礼をしました。(^^;ゞ



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2008/06

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

水無月



山形県白鷹町中山にて
by hama

三熊野神社大祭を緋く其言』田中興平

静岡県大須賀町横須賀、平成の合併により掛川市横須賀（通称遠州横須賀）と地名を変えたが、市街地より15キロ程南に位置し、北には緑豊かな小笠山、南には雄大な遠州灘をのぞみ、温暖な気候に恵まれた、風光明媚な小さな田舎町である。奈良・平安の時代にはすでに集落が栄えていたと言われている。その時代に勧請されたと言われる三熊野神社は、遠州横須賀の中心にあって町ともども千三百年もの歴史を刻み続けている。天正6年に横須賀城が築城されると三熊野神社も横須賀藩の総鎮守となることにより栄えた。遠州横須賀藩は時代の変遷により、三万五千石と五万石と石高は違いますが城下町として整備されていた。戦国時代も終わりをづけ人心の安定した時代を迎えると、三熊野神社大祭でも神事だけでなく、それに供奉する形の附祭が行われるようになった。

三熊野神社大祭は最近では毎年4月の第1金土日曜日に行われているが、江戸時代は正月の7・8・9日に行われる予祝祭であった。この祭は神事の神輿渡御、地固めの舞、田遊び、神子抱き、とそれに供奉する附祭の十三台の柵里（柵、なま）（遠州横須賀では山車の事を柵里と呼ぶ）の曳き廻しで構成されている。祭はあくまで神事が主でそれに付随する附祭は従であるが、時代と共に敬神の念が稀薄になってくると、従の方が華麗で豪華、人々の楽しみも手伝って何時かしら主従逆転してくる。遠州横須賀でもまつり人は三社祭礼囃子に合わせ「した

した」のかけ声のもと、ステップを踏んで柵里を左右に蛇行して練る曳き廻しが非常に楽しいので、附祭を行うことが祭と考えているまつり人が多い。しかし、遠州横須賀のまつり人は神事に対しても崇敬心大であって、神輿に柵里が供奉する場合、まつり人は土下座をして神輿を迎える。その附祭であるが最近の調査で文化文政期の江戸天下祭（山王祭と神田祭を言っ）の祭文化を可成り忠実に伝承していると言っ事が分かってきた。

（中略）

この柵里の形は一本柱万度型の山車と言って、天下祭では神輿の供奉をして江戸城の城門を潜り、將軍の上覧に浴した山車で、東京近郊に残っている江戸型山車の一時代前の山車である。

附祭の歴史を緋（緋、ひ）いて行くと起源は元禄九年（一六九六）にして、踊りを中心とした附祭を行っていた。その後、西尾隠岐守忠尚が横須賀城の城主に就任すると祭の改革を計り、享保十年（一七二五）頃江戸天下祭の祭様式を導入して、神輿、踊り、柵里をお城に巡行させ城主が上覧するようになった。



江戸天下祭に里帰りした横須賀の柵里
（平成八年 神田明神鳥居下）



【プロフィール】
たなか こうへい
1948年遠州横須賀に生まれる
遠州横須賀倶楽部ご意見番
静岡県掛川市横須賀在住

濱のいばせや 『いねめや』

互いに自分が持っている一芸を伝授し合い、アウトドアを思いっきり楽しもう！という冒険塾があった。

ここで知り合ったC女史は、デザイナー。中々センスの良い仕事ぶりの人だった。その彼女が突然、「フランスに渡る」と聞いた。早速仲間と送別会。世間話に疎い自分としては、何故今フランスなのか皆目判らない。しかも、彼女が希望したお店は、スペイン料理専門店。待ち合わせ時刻に行くと、既に女性陣は到着済み。主賓の彼女は今夜は特段光っている。

おいしい料理に舌鼓をうち、一段染する頃、お酒の勢いも駆りつつ、単刀直入に渡仏の理由を尋ねると…。「好きな人が行くから（「いるから」だったかな）」彼ははてっきり日本人かと思いきや、フランス人。ひとりで訪ねたフランス旅行の帰り。現地の空港で知り合ったらしい。以降メールでの会話が続き…。Cさんフランス語話せたんですね〜などと、妙な感心を挟みつつ、問はず語りのように話が進んでいく。その間の彼女の輝いていること！

恋をすると女性は綺麗になるといふ。その現場に、まさに立ち合わせて頂いたのでろう。手放せなかったはずの煙草も彼の希望で止めたらしい。三十半ばでそれまで築いてきたもの殆ど全てを投げ打って、やがて彼女は故国を離れる。

そこまでの決断ができる。それ自体がまぶしい。

遺伝子関係の学界で著名な村上和雄筑波大学名誉教授のお話。

人間の遺伝子を活性化させ、若さを保つ方法があるという。それは、「ときめく」「こらしい。何かに夢中になることにも」ときめき」があるものだが、どうも恋愛が最も強力な遺伝子活性化スイッチのようなのだ。おそろしく、恋愛に素直になれる人は性の別無く、遺伝子も素直に活性化されるのだろう。

人は恋するとき、心がときめく。
高校二年の頃、大きな片思いをしていた。随分と「人々好きになる・愛すること」の意味について考える機会を買ったことができたお陰で、究極自分の好意からしか始まらない「恋愛のエゴ性」に思い至る。

数度の失恋を経て、結婚後四半世紀、今思うことがある。相手が自分のことをどのように思っているかが、ただ純粋に愛せる人が居るといふことだけで、自らの内面がどれほど豊かになるか。それだけで、もう既に十分有難く幸せなのではないか。恋愛はエゴから始まるのだから。祭りや趣味に熱中する人も居る。夢中になれる仕事を持っている人は幸せである。これらも心がときめくならば、遺伝子を活性化する「大切な人生の時」なのかも知れぬ。

事務所も畳んで渡仏したC女史。生憎彼は、入れ違いにアフリカの某国に赴任となったらしい。歳の差も言葉や習慣も国境も越えて、どうか幸せになってほしい。

にかほ市は秋田県の日本海側最南端に位置し、平成17年10月に旧仁賀保町、金浦町、象潟町の3町が合併して誕生した。人口は約3万人である。これまでひらがな地名といえば、日本最初のひらがな市名である青森県むつ市（昭和34年）に見られるように「こじれ」「妥協の産物」という成り立ちが多いが、この3町は産業構造が類似し生活圏としても一体の地域であり、一度合併協議会が壊れたという経緯はあるものの順当な組み合わせであろう。

にかほ市の年間の観光入り込み客数は約180万人である。市の背後にそびえる出羽富士と呼ばれる鳥海山（2,236m）、松尾芭蕉が訪れた旧象潟町の蛸満寺が集客力のある観光資源、道の駅象潟が観光施設といったものである。秋田市から酒田市に挟まれた由利地方（にかほ市と隣接する由利本荘市も含めた地域）は観光という点から見ると、印象がもう一つという感が否めない。

秋田県においてほぼ県内全域で観光振興に力を入れているとあってよい状況であるが、自然、温泉、お祭りなどが主な観光資源となっている例が多い。にかほ市の観光資源を秋田県の他地域との差別化という点からTDKと漁港に着目したい。

にかほ市はTDK及びその関連工場群の集積地域である。旧仁賀保町はTDK創業者である斎藤憲三の出身地であり、TDK旧平沢工場跡がTDK歴史館として3年前に開館し、社史、各製品分野別（磁性製品、セラミック製品、応用製品、ヘッド、磁気メディア製品）の専門コーナーなど技術開発の歩みが見られる施設であり、充実した展示内容である。現在は、TDKのPR館の域であり、休日は休館である。

近年、産業観光・産業遺産が着目され、鉱山跡や近代工業を支えた工場などがとりあげられている。秋田県は鉱業県であったため、旧鉱山跡である尾去沢（鹿角市）、小坂（小坂町）などがその例である。しかしながら、現代の加工組立製造業、電子部品といった分野を産業観光にという地域は、秋田県はむろん隣県にもないものである。

また、漁港はどこにでもあると思われるであろうが、秋田県には以外と漁港らしい場所が少なく、船川港（男鹿市）程度である。にかほ市は旧町単位に平沢漁港、金浦漁港、象潟漁港があり、明治期まで北前船の寄港地として栄えた。また、漁村らしい景観が3港ともまだ残っており、特に金浦漁港は、漁港から坂道を登り旧金浦町中心部に至る街並みからかつての漁港の繁栄ぶりが感じられる景観が残っている。

TDK、漁港とも多数の観光客が来て地域に多額の観光収入をもたらすというものではないであろうが、にかほ市の観光に一考したいものである。

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。

相続について⑨

最近あった相談

今回のケースは、地方都市の一等地にまとまった土地を持っていて不動産投資をされた方の相談です。

Case Study

内山さん(仮名) 駅近くの一等地に駐車場を持っていましたが、相続税対策のために、2億円の建設費用で、6階建てのマンションを建設。自己資金7000万円、残り1億3千万円を銀行から借りました。

1,2F部分をテナントに、その上を独身向けワンルーム住居部とし、その家賃収入で返済は余裕を持って行えるはずでした。

デベロッパーは、立地条件からテナント部分も住居部分もすぐに見つかる、との話だったので。

ところが、近隣に新しいマンションが建設され、駐車場やアクセスなどの条件が、内山さんのマンションより有利なものでした。

そのため店子のコンビニが、その新しいマンションに入った大手コンビニに客を奪われてしまい閉店、住居部分も入居率が50%を下回る状況になってしまいました。

そのため、テナント、住居の家賃も下げ、入居者には更新時の家賃を引き下げる措置をとりました。

しかし、テナントも住居も一向に入居率は上がり、そうすると、借入金の返済は持ち出しとなってしまい、先行きが見えない不安に内山さんは苦しんでいます。

私のような素人の目から見ても、立地条件はよいと思われるのに、何でこんなことになったのでしょうか？

Anser

大手の不動産業者にお聞きしたところ、ここ数年で、建設費の値引きが激化、割安で、良質なアパート、マンションが増えているそうです。ところがその一方で、人口に対して供給過剰気味になっているとのこと。

内山さんは、銀行に勧められるままの業者と話をし、他者の見積もりや計画など、全く取らずに立ててしまったため、コスト的には高いものになっている、との指摘をいただきました。

このように大型の物件をお考えの場合、複数の業者から見積もりを取ったり、採算性の見通しや計画など話を聞くなどすることが大切になってきます。

静岡県焼津市にある温泉ホテルの建替えの相談を受け、会長、社長、常務、そして私のパートナーの設計事務所のKさん連れ立って由布院に行くことにした。

我々が最初に目指した店、それが「由布院 市の坐」だ。

由布院観光総合事務所事務局長を務めている時に、大学卒業して入所してきた者がいた。井尾君だ。彼の家は由布院で100年続く「井尾百貨店」という名の酒屋さんだ。かつては呉服屋だったが、由布院の変化に合わせて、お酒をはじめ旅館用食材の仕入れ販売業に業態を変えてきている。しかし、お酒の小売がパッとなくなってきた。安売り量販店、コンビニの出店で競争相手が増えてきたことが主たる原因だ。井尾君はというと、観光総合事務所勤務を続けることよりも町内で起業することを選択した。ニセコ町に向向、全国初の観光協会の株式会社化に尽力し戻ってきた後、間もなく「桐屋」という日本茶の喫茶を由布院美術館の一角で始めた。7,8人のカウンター席で、目の前でパーテナーよろしく九州各地の銘茶、玉露、ほうじ茶、冷茶を入れて出してくれていた。他にも特に評判の高かったおはぎ、プリンなども作り、テイクアウトにも応じていた。ここで商売のノウハウを身につけた彼の次なるチャレンジが「結豆腐 市の坐」だ。

井尾百貨店の道路を挟んで前の敷地に、富山県からの大屋根の古民家を移築改装した豆腐料理専門店がそれだ。地元の湯山からの豊かな山水で仕込んだ自家製の「結豆腐」を看板メニューに、「湯葉のパリパリサラダ」「厚揚げ入りの親子丼」など、バラエティーに富んだ豆腐料理が並ぶ。コースの最後に出てくるご飯には参った。焼いた長ネギを入れ陶器釜で炊き込んだもの、これまで口にしたことの無い美味であった。

伺ったのは昼時、特別に参千円コースの料理を用意してくれた。今のところ夜のみの営業だから、まさに特別・貸切である。

設計図を見たときに、古民家移築のため、店としての動線が大丈夫かなと思ったが、「市の坐」という庄屋に招かれ、そこで振る舞いを受けるといった場面には、効率的な動線の確保は逆に興ざめてしまうので、これでよし。

混んでくればいたるところで飲み会と言うノリも実現できるように囲炉裏の間、板の間には敷物、箱膳も用意されている。

器も、各処においてある骨董品も、相当に吟味されている。聞くところによると市の坐プロジェクトには由布院御三家のひとつ山荘無量塔の藤林さん、由布院NO.1の骨董店「五体投地」が強力な助っ人として入っているとのこと。そう言えば、藤林さんは25年程前、日田市から由布院にやってきて喫茶、食事処、そして今では、亀の井別荘、玉の湯と肩を並べる旅館「山荘無量塔」を創った人だ。井尾君も喫茶、食事処とその途を歩んでいる。成長が大いに楽しみではあるが、まずはこの「市の坐」が地域の結いの店、そして遠来の方々が豊かで至福のときを過ごす店として育つことを望んでやまない。お楽しみはまだまだこれからだ。皆様、由布院お出かけの際は、B&Bの宿+「市の坐」の夕食をお薦めします。

